

◆先行研究◆

言語学習ピリーフ

言語学習の様々な側面・次元について、
学習者が抱く信念の総体 (Horwitz1987)



学習動機・習得・学習ストラテジーに影響を与える (Horwitz1987)
地域別・国別に分析することは
日本語教育の現場に重要な情報を与える (木谷1998)

複言語を話す学習者に
着目した研究は見当たらない

複言語話者に共通する
ピリーフがあるのでは？

◆研究目的◆

複言語話者に焦点を当て、
彼らが持っている日本語学習に対するピリーフを明らかにする。

複言語話者: 程度やレベルに関わらず、日常的に2つ以上の言語を使用する人
(姫田2011 参考)

◆M-GTAの結果図◆

◆調査方法◆

- ①BALLI質問紙 (Horwitz1987)を参考に作成した質問紙による調査
- ②半構造化インタビュー (1人あたり約1時間半)

◆分析方法◆

・M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)

◆調査対象者◆

対象者	出身国	第一言語	日常使用言語 (使用頻度順)	その他 学習経験のある言語	日本語学 習歴 レベル
J	ベルギー	オランダ語	オランダ語、英語 フランス語、ドイツ語	ラテン語、韓国語 スペイン語	約5年 C1
K1	ベルギー	オランダ語	オランダ語、英語 フランス語	ラテン語、ドイツ語 イタリア語	約5年 C1
K2	ベルギー	ドイツ語	オランダ語、英語 ドイツ語	ラテン語、スペイン語 イタリア語、韓国語	約5年 C1

* 2018年調査時点の情報、レベルはCEFRの言語レベルを参考

【多言語環境・複言語主義下での生活】

【多言語環境・複言語使用の現状】

- <複言語使用の必要性>
- <日常的に複数言語を話す機会>
- <豊富な言語学習の機会・経験>
- <複数言語を織り交ぜた会話>
- <相手・場面による言語の使い分け>

< [複言語主義に基づく言語観] >

- <複言語使用の意義>
- <コミュニケーションのための言語使用>
- <言語使用に対する行動主義的認識>
- <言語能力に対する評価・認識>
- <言語間・言語能力の偏りを自覚・許容>

カテゴリ	【 】
サブカテゴリ	[]
概念	< >
推移	→
影響	→

【日本語学習への意欲】

【統合的動機づけ】

- <伝統的な日本文化への興味・関心>
- <サブカルチャーへの興味・関心>
- <日本の歴史や政治や経済への興味・関心>
- <日本語そのものへの興味・関心>
- <日本人への興味・関心>

【日本語学習の目標】

- <日本人との円滑なコミュニケーション>
- <自然な日本語を習得したい>
- <より高度な日本語を習得したい>
- <日本人のように話せるようになりたい>
- <日本語の研究資料を読みたい>
- <日本語を使って生活・仕事をしたい>

【日本語学習に対する態度】

【積極的な学習方法】

- <クラスメイト・友達との協働学習>
- <自己モニターによる学習>
- <様々な学習リソースへのアクセス>

【コミュニケーションを重視した日本語学習】

- <話す練習への積極性>
- <実践的な練習への意欲>
- <日本語での本物のコミュニケーションを期待>
- <文法的な正しさにこだわらない姿勢>

【日本語教師への期待】

- <教師としての高い専門性>
- <教師としての経験>
- <日本語母語話者教師への期待①: より自然な日本語>
- <日本語母語話者教師への期待②: 本物の日本語使用の機会>
- <非日本語母語話者教師への期待①: 母語での解説>
- <非日本語母語話者教師への期待②: 日本語学習の経験者>

【学習効果への期待】

- <実践して学習成果を確かめたい>
- <わかるより使える日本語>

【自分の日本語に対する自信】

【日本語習得への自信】

- <複数言語を学習した経験からくる自信>
- <自分が複言語話者であることからくる自信>
- <日本語と他の言語との比較>

【自分の日本語使用に自信を持ったきっかけ】

- <学習を重ねてきた自負>
- <実践的な練習で得た好評価>
- <日本人との交流での成功体験>
- <日本での留学生活>
- <日本語を使用した研究活動>

【自分の現在の日本語使用に対する自信】

- <日本語を理解することへの自信>
- <日本語を話すことへの自信>

◆まとめ・考察・残された課題◆

- ・複言語話者であるベルギーの日本語学習者は、日本語母語話者教師と非日本語母語話者教師に対して異なる期待を持っている。
 - ・言語能力の偏りを認めている点や、文法的な正しさにこだわらないというピリーフは、多言語国家であるフィリピン(片桐2005)やマレーシア(長澤1988)の日本語学習者とは異なるものである。同じ「複数の言語を使用する学習者」であっても、生活環境及び学習環境によりピリーフに差が生まれることが示唆される。
 - ・また、今回の対象者3名のピリーフの特徴としては、日本語習得や日本語使用に対して大きな自信を持っていることである。これらは、他の国や地域の日本語学習者、特に1つの言語しか日常的に用いないという学習者にはあまり見られないピリーフである。
 - ・学習者や教師によっては母語話者を目指す教育には否定的な声もあるが、今回の対象者は「自然な日本語」や「日本人のような日本語」を目指していることがわかった。もしこれが複言語話者の典型的なピリーフであるならば、教師はこれに応えられるような指導・学習内容・教材の選定を行っていく必要がある。
 - ・この3名にとって、日本語は自分たちの第一言語や日常使用言語とは言語的に遠い距離にある言語であるにもかかわらず、比較的高いレベルの習得に成功しているのは、これまでに複言語主義を基盤とした言語教育を受けてきた中で培われた言語学習能力や言語学習に対するピリーフが1つの要因であると考えられる。
- △本研究の限界と課題: 本研究では、半構造化インタビューを実施しM-GTAを用いて分析することで、学習者のピリーフの詳細を明らかにすることができた。しかし、国や日本語レベルを限定した調査であったため、複言語話者のピリーフとして一般化することはできない。そのため、国や地域を限定せず、なおかつ対象者の数を増やした調査を行い、複言語話者のピリーフとして一般化、より精緻化することが必要である。

◆主な参考文献◆

Horwitz, Elaine (1987) Surveying student's Beliefs About Language Learning, Rubin, J and Wenden, A(eds.), *Learner Strategies in Language Learning*, pp.119-132, Prentice-Hall International
 木下康仁(1999)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 質的実証研究の再生』弘文堂
 姫田麻利子(2011)「複言語複文化主義とは何か」『大東文化大学紀要<人文科学編>』49, pp.251-268